

工学部日本人学生を対象とした海外協定大学とのオンラインピア学習プログラムの開発
Development of Online Peer-to-peer Learning for Japanese Engineering Students
in Collaboration with Overseas Colleges

川崎典子¹⁾

1) 宮崎大学工学部工学基礎教育センター、准教授

1. はじめに

海外の大学とのオンライン協働学習は Collaborative Online International Learning (COIL) と称され、多くの国内大学で実施されており、コロナ感染症の流行による国内外でのオンライン利用の普及によってさらに拡大傾向にある。COIL の経緯や国内での発展については、国内での COIL の先駆けを作った池田 (2020) によれば、COIL は「海外の大学の科目 (クラスルーム) と、国内の大学の科目 (クラスルーム) がペアを組み、それぞれのクラスの履修学生が混合したバーチャルの国際的な小グループを形成し、彼らの主体的な行動を前提としたプロジェクト型の学習活動」(池田, 2020, p.21) を指し、語学交流を目的としたオンライン留学とは性質を別にする。

COIL では、日本の大学と海外の大学の教員が連携して授業計画を立て、授業を通して日本の学生がデジタル技術を使って生配信で海外の学生とつながり、学生たちが授業内外で交流しながら授業の目的に合った学びを得ることができる。これまでに、池田 (2016)、藤掛・山岸 (2019)、藤山 (2021)、柴田 (2022) など国内での先行事例が蓄積されてきた。COIL のメリットは、日本人学生が日本にいながら海外の学生と交流し、単なる交流を超えた学習活動の過程で、互いの知見を共有したり、社会的課題解決の議論をしたり、学術的な活動ができる点にある。一方で、COIL のデメリットは、国の異なる教員同士が授業計画を立て、授業という決められた空間の中で多くの学生をオンラインでつなぐため、教員間の協議を含めた多くの準備時間と高いデジタル技術が必要とされることである。また、受講者の学生には海外の学生と教員の発言を聞き取る相応の英語力が求められ、少人数のグループ編成とは言っても集団に属した状況下のコミュニケーション力が必要とされる。しかしながら、宮崎大学工学部には、英語に苦手意識を持ち、集団での会話を不得意とする学生が多いことがこれまでのアンケート調査や行動観察から分かっている (川崎, 2022)。宮崎大学農学部の英語科目で COIL に取り組んだ荒木 (2020) は、海外の大学に連携先を得て、授業の中で COIL を実施した過程で得られた成果を明らかにしているが、クラスサイズの大きさと必修科目の受講者数の多さを考慮しながら実施してきた苦労も伺える。クラスサイズと必修科目の受講者数が農学部を上回る工学部においては、英語授業における COIL の導入は非常に難しいと言えるだろう。学部 1 年次における週 2 回の英語科目の受講をピークに、学年進行につれて英語科目が減少する工学部においては、英語力の向上には正課外学習活動の活用が鍵となる。

そこで、宮崎大学工学部では、授業外の英語学習の有用性とオンラインの活用を考え、ニュージーランドの協定大学の協力を得てオンラインピア学習プログラム¹を開発し、2021 年 10 月～2022 年 2 月に実施した。日本人学生 7 名とニュージーランド人学生 6 名がペア²になり、互いの都合の良い日時を選

¹ COIL と異なる性質を持つ海外の大学とのオンライン協働学習であるため、オンラインピア学習と名付けた。ピア (peer) は「仲間」を意味し、ピア学習 (peer learning) には単なるペア学習による交流を超えた助け合いの要素を含む。

² ニュージーランド人学生 6 名中 1 名は日本人学生 2 名を引き受けて 1 対 1 のペア学習に取り組んだ。

び、自宅等の適当な場所で Zoom を介して 1 対 1 の交流を図った。本稿では、学習プログラムの開発と実施の経緯を追いながら、参加者の作成資料とメール・SNS の記録、各回のレポート（Google Forms 利用）および最終回アンケートに加え、一部の参加者とのフォローアップ調査の結果を通して確認できた成果と課題を整理する。

2. 海外協定大学とのオンライン協働学習

2. 1 実施に至る背景

宮崎大学工学部は 2011 年 4 月に国際教育センター(以下、センター)を設置し、2014 年 4 月～2020 年 3 月には英語教員を配置して、学生の課外英語学習を積極的に支援してきた。工学部の改組でセンターは廃止されたが、工学部内での英語教員の配置を継続することで、学習支援のノウハウは現在も工学部に残されている。これまでに英語教員が取り組んだアンケート調査と行動観察とインタビューを通して工学部学生の特徴やニーズが洗い出され、センターによってその特徴やニーズに応じた英語学習の方法が提案され、課外学習活動として実施されてきた。工学部学生の特徴には主に①～④が挙げられる。

- ①集団での会話の場面における自己表現を不得意とする
- ②大学入学までの英語学習や国際交流での成功体験が少ない
- ③国際社会での活躍が期待されるエンジニアには英語が必須であると理解しているが、強い苦手意識から自律的な英語学習には踏み出さない、
- ④大学院修士課程までの 6 年間教育を見据えた教育設計の下で、学部後半から専門性の高い授業が増えるため、昼夜を問わず専門科目に時間をかける傾向にある

これらの特徴を考慮し、大学構内での空き時間の活用と少人数での設定に加え、身構えずに参加できる遊びの要素を活かした学習活動が考案されてきた。例えばその学習活動には、昼休みに集まって英会話に取り組む「ランチタイム英語」や VR 空間でのロールプレイで英語を話す「VR 英会話」があり、いずれも工学部学生が大学構内での空き時間に 1 対 1 のペアまたは 3 名以内の少人数で行う英会話活動として設定され、一定の参加人数を維持してきた。しかしながら最近では、コロナ禍による留学生の減少と交流活動の制限が起因し、英会話活動への留学生の参加が見込めず、日本人学生同士の交流に留まる活動となり、英語だけに集中して話す機会とは言い難い活動内容であった。その問題点を解決し、さらには高度な英語力を使って英語話者とのコミュニケーションに挑戦したいという一部の工学部学生のニーズに答えるためにも、海外の学生とのオンラインピア学習プログラムを開発することになった。

2. 2 準備段階での取り組み

企画時点では、時差の少ない場所で英語話者の工学系学生が存在する協定大学を選定し、ニュージーランドのクライストチャーチ工科大学に協議を申し入れた。協議においては、学習プログラムの構想を共有するだけでなく、工学部学生の特徴や学生生活様式などを情報共有し、議論が進められた。クライストチャーチ工科大学で選択科目の日本語を担当する教員が協議に加わり、日本語の受講者であれば、日本文化への関心が高く、日本人学生との交流に積極的に協力する姿勢が期待されることが分かった。協議の結果、工学部学生の特徴①と②で挙げた点を特に重視し、1 対 1 のペアでパートナーからの支援を受けながら時間をかけて会話できる学習環境を提供する「ピア学習」で実施することに決めた。また、単なる英会話では話題に困って会話を続けられない学生がいることを予想し、5 回の学習活動を 5 つのタスクに基づく 1 時間程度の交流として設定した。タスクは、ミニプレゼン 1（自己紹介・大学紹介とご当地の紹介）、ミニプレゼン 2（社会問題や地球規模的課題に対する考え方）、対話 1（ポップカルチ

ャー・現代文化と伝統文化)、対話2 (互いの将来ビジョン)、ディスカッション (日本とニュージーランドの大学生活) で構成した。

2021年10月からの学習プログラムの開始を目指して、夏季休業期間の9月に募集案内(図1)を提示して参加者募集を開始した。応募に際してはGoogle formsを使用し、図2に示す項目について質問した。宮崎大学での参加者募集と同時に、クライストチャーチ工科大学においてもパートナーとして協力できる学生を募集してもらった。

参加申込締切 10/22 (金)
11~1月実施 定員先着10名

NZ (ニュージーランド)の学生とオンライン学習!

オンラインで楽しく会話しながらピア学習!

- 1対1で深い会話 たくさん語り合おう!
- 1回1時間&5回のタスクで深い勉強 英語力をみがく!
- 好きな時間に接続できる スキマ時間で英語を学ぶ!

ピア学習のパートナー (NZの学生(*1)) と英語で連絡を取り合える方。
1対1の会話に取り組める英語力(*2)が必要です。

参加条件 (*1)クライストチャーチ工科大学 <https://www.ara.ac.nz/> (*2)申込時に英語レベルを確認

事前相談後に 下記サイトから担当窓口にお知らせください
参加申込できます <https://forms.gle/xefj3pwqP2XGik5E6>

【担当窓口】工学基礎教育センター 川崎@工学部A棟A301 kawasaki@cc.miyazaki-u.ac.jp

図1 オンライン協働学習の募集案内

- 参加希望理由
- 参加に際して確認しておきたいこと
- 提示された参加条件 (ピア学習のパートナーと英語で連絡を取り合え、1対1の会話に取り組める英語力を有する) の該当の有無
- 自宅等で1時間程度参加できる時間帯
- (パートナーを決める際の参考情報となる) 趣味や特技、好きな音楽・映画などの個人情報

図2 応募の際の質問項目

宮崎大学工学部では6名の学部学生と2名の修士学生の申込みがあり、説明会と個人相談を経て6名が参加を決めた。その後博士学生1名の追加申込みを受け付け、合計7名の参加者とした。参加希望理由には、「海外留学に興味があるので先にネイティブとの英会話を経験しておきたかった。」「長期間同じ人と話す機会は貴重で、同世代の学生が相手という点が魅力的だと感じた。」「ネイティブの学生と直接話すことができるから。」「1対1なので英語で会話を繋げる力がつきそうだった。」「コロナ禍で留学に行く機会がないので、海外の人と英会話ができる環境が欲しい。」といったものが挙げられた。参加者の英語力としては、5名がTOEIC L&R600点以上を有し、TOEICスコアを有していない2名はそれぞれ英検準1級と英検3級を持っていた。表1の指標を基に、学習プログラムで必須のListeningとSpeakingについて自己申告した結果では、いずれもBと申告した学生が2名、いずれもCと申告した学生が5名いた。これらの英語力に関する情報はクライストチャーチ工科大学にも共有した。

表1 英語力の指標一覧

Listening の指標	
A	英語母語話者が話すスピードについて行ける (例: 洋画・海外ドラマが難なく聞き取れる)
B	留学生など英語使用者が話すスピードについて行ける
C	留学生など英語使用者にゆっくり話してもらえば理解できる
D	日本人が話す明瞭でゆっくりした英語であれば理解できる
E	相手の国籍に関係なく英語の音声では理解できない
Speaking の指標	
A	英語母語話者が話すスピードに合わせて話せる
B	留学生など英語使用者が話すスピードに合わせて話せる
C	留学生など英語使用者にゆっくり話してもらえば応答できる

D	日本人が話す明瞭でゆっくりした英語であれば応答できる
E	相手の国籍に関係なく英語では応答できない

参加者の決定後には Zoom を用いたオンライン配信でガイダンスを開催し、スライド資料を示しながら、以下 3 点について説明した。

- (1) オンラインピア学習の手順とスケジュール
- (2) ピア学習で取り組むタスクとレポート
- (3) パートナーの情報と連絡の取り方

(1)では、「パートナーに連絡し、都合のよい日時を決める→パートナーにピア学習の日時・内容・接続方法を伝える→パートナーとピア学習を行う→学習中にメモを取り、学習の終了後に担当教員までレポートを提出する」という一連の流れを繰り返すように伝えた。(2)では、上述の 5 つのタスクを示し、ミニプレゼン 1 から開始する以外には好きな順番で各タスクを実施していくように伝えた。また、レポートについては、利便性と即時性の点から Google Forms を使用し、毎回の感想と学習内容を尋ねるようにした。(3)では、パートナーの氏名・性別と日本語学習歴とパートナーとなる希望条件を示し、パートナーのメールアドレスを伝えた。その際、英文メールの書き方について助言するとともに、Eメールでは連絡が取りづらい状況に備えた代替手段の確保をするように指導した。

2. 3 実施段階の参加者の様子

2021 年 11 月 5 日にガイダンスを受けた参加者は各自でパートナーと連絡を取り合った。初回の連絡時点では担当教員（本著者）をメールに取り込むように伝え、学生同士の意思疎通に誤解が生じないように支援することにした。それ以降は参加者各自が個別にパートナーに連絡を取ることにし、最後までメールでやり取りした者もいれば、LINE と Messenger のいずれかで連絡を取り合った者もいた。

参加者は互いの都合の良い日時で日程調整した後、全員が Zoom を使って学習活動に取り組んだ。大半の活動日時は平日の午後 1 時から 5 時までの間に集中していたが、平日の昼休み時間帯を利用した者や休日の午前中を利用した者も多い。中には深夜の午前 2 時に活動した学生が 1 名おり、その学生によれば、アメリカの大学が提供するオンラインライブ講義を受けた経験から深夜に活動する習慣になっていたことに加え、パートナーも深夜の活動を希望したことが背景にあった。

学習活動ではプレゼンのタスクがあり、学生は PPT スライドを準備して取り組んだ。自己紹介・大学紹介では地図や写真を使って文字情報を少なくした構成で臨む学生が多かった一方、社会問題等に関するプレゼンではデータ量と文字情報の多いスライドが見受けられた（図 3）。

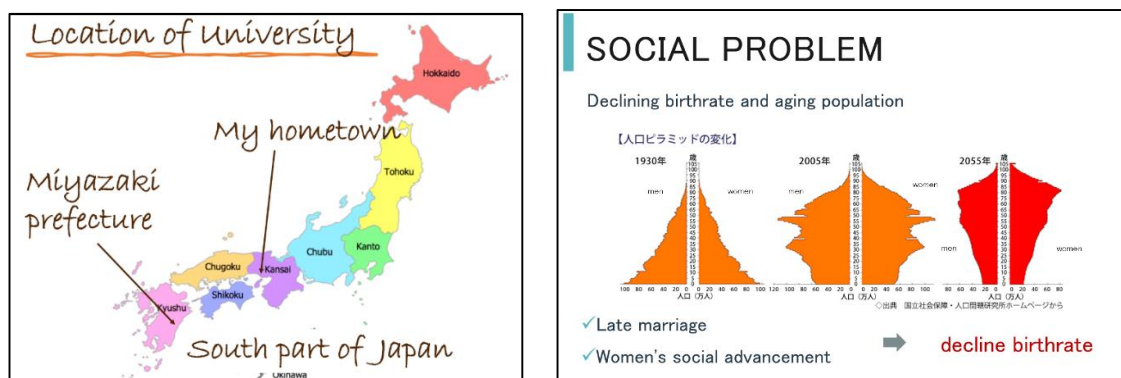


図 3 学習プログラム参加者が作成したパワーポイント資料

各回の活動後のレポートでタスクの難易度を5件法（「とても簡単だった」「やや簡単だった」「どちらともいえない」「やや難しかった」「とても難しかった」）で尋ねたところ、初回に設定したミニプレゼン1においてのみ「難しすぎて完了できなかった感がある」と回答した学生が2名いる。そのうち1名は、「ネイティブの英語は早くて聞き取りづらかった。」という感想を書いており、その学生はフォローアップ調査でも「1回目で（一人で）1時間会話を続けるのが大変だと気づいた。」とふりかえっている。一方で、同じタスクに対して「とても簡単だった」「やや簡単だった」と回答した学生が3名おり、彼らはいずれも課外学習活動に参加するなど日常的に英会話の機会を持っていたことが分かった。そのうち1名が、「用意していたスライドは5分程度のものでしたが、普段友達と話すように、話す内容が色々と広がっていった。」と感想を述べているように、学習プログラム参加前の英会話への慣れが初回のタスクの難易度に強く影響したと思われる。

最終回アンケートの感想（図4）からは、参加者の満足感の高い学習プログラムだったことが分かる。

- ネイティブスピーカーの人と日本にいながら会話するのはなかなか得られる経験ではなかったためとてもよかった。
- オンラインツールを用いて話をする経験は今までなかったので、有意義な時間となった。
- 普段だったら、なかなか話すことのできない国の方と、オンライン上でやりとりし、お互いの国について話し合えたことは、貴重な経験だった。
- 初めて本格的な英語圏の人と英語で対話して自分の英語力の低さや英会話の難しさやいい所を知れるいいキッカケになった。
- タスクテーマも重くなく、縛りがあるわけでもなかったなので、あまり気を重くせずに取り組めた点がとても良かった。
- （大人数だとなかなか話に入り込めず、分からない単語があっても流しがちになってしまうが、）1対1なので、自分が必ず話をしている状況にあるのも良い点だと思った。
- 食べ物や環境に差はあるものの、若者の高齢者に対する考え方やキャンパスライフなどについては共通する部分も多かったため、ニュージーランドが身近に感じた。
- 時間を確保し英語を話すという貴重な体験ができた。
- 5回という多くも少なくもない回数でちょうど良かった。

図4 アンケート結果で得た感想

2. 4 プログラム設計上の工夫点

今回の学習プログラムでは、正課外学習活動の活用による英語力の向上を図る目的を、対象者の特性を考慮しながら学習内容を開発し、参加者の利便性に照らしてプログラム設計した。1つ目の工夫点に、参加者自身がパートナーと日程調整をする仕組みが挙げられる。これについては、「お互い仕事や課題等があったため、二人で調整する方式は非常にやりやすかった。」「時間を見つけて始めることができたのでよかった。」という参加者2名からの好評価を得られた。また、別の参加者1名からは「スケジュール調整の会話もコミュニケーションのきっかけになるので必要だと思う。」という意見が出され、日程調整が会話の糸口として機能したことも分かった。

参加者のほとんどが英語ネイティブの学生に英文メールを書く機会はいまだに少なく、英語でのメッセージのやり取りを含めて、今回の学習プログラムで初めて挑戦した者が多い。図5に例示した参加者は英検3級の取得だけでTOEICの受験経験はなかったが、パートナーとのLINEメッセージを見る限

り、的確に意図を伝え、相手の文意を理解して迅速に返答できている。また、別の参加者のレポートによれば、メッセージのやり取りを通して “It would be appreciated that ~.” “Would you please ~?” “I am very sorry if I say something rude.” “This is a friendly reminder for ~.” という表現を学んだことが分かった。さらには、最終回アンケートで、参加者2名が「メールでのやりとりによりライティング能力も向上できたと感じた。実際に自分の意図が伝わるように推敲することで知らなかった英語が身につく感覚があった。」「自分から時間を希望して連絡するなど、今後役に立つ英語の表現も勉強できた。」と述べている。これらを勘案すると、自分の希望や意思を伝え、相手の意向を把握するための Writing の実践につながったことが分かり、学生同士に英文メールのやり取りをさせる仕組みは2つ目の工夫点と言えるだろう。

【数回実施後のLINEメッセージ】

● パートナーに宛てたメッセージ : Sorry bro. I've been asked to help with a part-time job, so can we move the time up a bit? Even half an hour would be fine.

(パートナーの返信 : Oh, yeah man that shouldn't be an issue. So did you want to do 3:30?)

● 返信から2分後のメッセージ : Can't we do 2:30? Or maybe as soon as you're done with your schedule?

(パートナーからの返信 : Oh yeah 2:30 is fine mate.)

● 返信から1分後のメッセージ : Thanks, I'm really looking forward to it.

(パートナーからの返信 : Sweet! Me too.)

図5 英語でのメッセージの内容

活動後のレポートでは参加者に感想を尋ねるだけでなく、各回の活動で参加者が知った英語表現やニュージーランドの社会情報を記録してもらった。その記録(図6)からは、多少主観的な見解もあるとはいえ、同世代交流を通じた新鮮な発見や気づきを得られたことが分かる。最終回アンケートでは、「食べ物や環境に差はあるものの、若者の高齢者に対する考え方やキャンパスライフなどについては共通する部分も多かったため、ニュージーランドが身近に感じた。」「パートナーの学生と意気投合しながらプログラムを進めることができたので良かった。」「他国の学生とマンツーマンで価値観や文化などを共有でき楽しかった。」「オンラインで尚且つマンツーマンという誤魔化しがきかない状況で刺激的だった。毎回何を話そうとか、会話がつまったら何を話そうとか考えながらやり毎講義終わったあとは何か達成感のようなものがあった。」という感想が見られたことから対話を深めた様子が見られ、固定されたペアで継続的に取り組むピア学習が3つ目の工夫点として挙げられる。

【ニュージーランドの社会情報】

- 大学の授業数は日本と同じくらい少ない。
- 日本語が学校で第二外国語として学べる。
- 1週間ほど前から、コロナワクチンに対して講義デモが起きている。
- 同性結婚が認められている。
- 島国なのであまり有名人などがライブに来ない。
- 家の価格が高騰しているため都会ではほとんどの人が家を購入できない。
- 川の汚染が問題になっている。
- 年金制度は日本と同じく65歳から支給される。

【ニュージーランドの社会情報（つづき）】

- 就職活動はスムーズで、学生から希望する会社を先生側でアンケートを取り、それを各企業に通達するような形。大学側で適正などを判定して就職先を提案することも多く、非常に簡単に仕事を見つけることができる。
- 職業に対する依存（日本のように仕事が大事という考え方）は少なく、自分のやりたいことと違ったら辞めることもある。
- 今の若者は、SNSでtiktokやinstagramを使用し、クラブに行き踊り、お酒を飲んで楽しむ。
- 日本の任天堂スイッチやプレステも流行っており、特にポケモンが人気らしい。
- 日本のマニアックなアニメが人気である。
- 公共交通機関は少なく、車が主流である。
- 結構徒歩移動が多い。
- 基本的にアウトドアで、DIYが盛んである。
- カジノがあり、ポーカー等をやる人が日本より多い。

図6 参加者が記録したニュージーランドの社会情報

4つ目の工夫点として、クライストチャーチ工科大学の学生がパートナーとなった日本人学生の英語力を評価する仕組みの導入が挙げられる。“The ALTE Framework (ALTE, 2002)”と“The EIKEN Can-Do List (Eiken Foundation of Japan)”を参照し、社会的な側面と学術的な側面に分けて設けた基準（表2）を選択する方式で、リスニングとスピーキングの面から日本人学生英語力を判断するものにした。最終回後に全体評価をする形では最終回の印象が強くなり残ってしまうと考え、毎回の活動毎に評価してもらうようにした。図7に示したコメントを書くなど、クライストチャーチ工科大学の学生は的確に日本人学生の英語力を考察している。パートナーから寄せられた具体的な助言や心からの誉め言葉は日本人学生の励みになったと思われる。実際、評価シートを手に入れた直後に担当教員（本稿著者）に喜びを伝えに来た参加者もいた。

表2 評価の基準

	A Listening & Speaking (Social)	B Listening & Speaking (Study)
Level 5	CAN talk about complex or sensitive issues without awkwardness, understanding colloquial references and dealing confidently with hostile questions.	CAN understand a wide variety of content from a range of professional and educational situations and also enjoy jokes, colloquial asides and cultural allusions.
Level 4	CAN keep up conversations of a casual nature for an extended period of time and discuss abstract/cultural topics with a good degree of fluency and range of expression.	CAN follow abstract argumentation, for example the balancing of alternatives and the drawing of a conclusion, and express his/her opinions with a reasonable degree of accuracy.
Level 3	CAN keep up a conversation on a fairly wide range of topics, such as personal and professional experiences, events currently in the news.	CAN give a clear presentation on a familiar topic, answer predictable or factual questions, and convey his/her feelings.

Level 2	CAN express opinions on cultural matters and familiar things in a limited way and pick up nuances of meaning/opinion.	CAN understand advice provided the speaker speaks slowly and take part in simple interaction about familiar things.
Level 1	CAN express likes and dislikes in familiar contexts using simple language such as ‘I like....’.	CAN understand simply constructed sentences and express simple opinions using expressions such as ‘I don’t agree’.
Breakthrough Level	CAN ask simple questions of a factual nature and understand answers expressed in simple language.	CAN understand/use basic words and phrases and set expressions.

- Confidently described his goals and aspirations and answered my questions about his feelings towards reaching those goals confidently.
- Seemed quite excited about his future, and it was pleasant to hear him talk about it. Asked a lot of good questions and understood everything I said.
- Can effectively communicate in English however still needs work on how to use particular vocabulary e.g. strong, very.
- Was able to keep up a good conversation about our cultural similarities and differences.
- English ability was a pleasant surprise she only made very minor mistakes that did not take away from my understanding. Her power point was well made with no grammar or spelling mistakes.
- Shared great, enlightening stories about her schooling and the systems of schooling in Japan. She used good vocabulary and her ideas flowed logically.
- Needed help when explaining certain aspects of school and university. He should practice speaking more, even if it's on his own.

図7 日本人学生に向けて書かれた評価シートのコメント

3. 課題

オンラインピア学習の計画・準備・実施を通して得られた課題は主に3つある。1つ目に、計画段階で日本との時差の少ない海外協定大学を選ぶ難しさがある。数時間以内の時差にある立地に加え、英語でのコミュニケーションに円滑に取り組める学生にパートナーとなってもらえる大学でなければならないとなると、選択肢が限られてしまう。さらには、オンライン上でスライド資料や動画を見せながら会話を継続できるネット環境も必要となる。ただし、最終回アンケートでは、今後の参加希望について複数選択可能な状況で尋ねた質問に対して、「同様のタスクで、時差を考慮せず、オーストラリアかNZ以外の英語圏の国であれば、参加したい」を選んだ者が回答者6名中4名いたことから、学生にとって時差は大きな障壁ではないと言えるかもしれない。2つ目に、計画・準備の過程ではカウンターパートとなる担当教員間の協議を通じた綿密な情報交換が必須となるため、プログラム開始前の情報交換に多くの時間を割かれたことである。情報交換には学習設計と学習内容だけでなく、対象とする学生の実態の共有が欠かせない。学生の関心が合致するか、授業外の時間の使い方に隔たりがないか、参加を希望する学生同士の成熟度に応じた助け合いができるか、といった点に注意を払い、ペアの組み合わせを考慮せねばならない。そのため、担当教員間で協議しやすい関係性を構築しておく必要もある。3つ目に、

実施中の進捗管理に努めたにも関わらず中途半端に終了した参加者がいたことが挙げられる。進捗自体は各回のレポートの提出状況で容易に把握できたが、未提出の場合の注意喚起やプログラムの進行遅れの際の状況確認で参加者と対話する場面が多くあった。結果的に、プログラム終了には最も早い参加者と最も遅い参加者の間で約1ヵ月の差が生じ、2月末日のプログラム終了期限に間に合わせるために複数のタスクを1回のオンラインピア学習に詰め込んだ者が2名いた。また、別の参加者1名は5回のオンラインピア学習には取り組んだものの、1回しかレポートを提出しないままに終わった。この課題の背景には学生自身が学業・研究活動の時間を管理できたかどうかに関わっており、学業・研究活動で多忙化する時期を見通すスケジュール調整能力の高さが求められた。また、課外学習活動の継続に求められる動機づけの弱さがあったことを認識しておく必要がある。今後同様の学習プログラムを実施する際には、参加希望者に対して時間管理の必要性和動機づけの重要性を伝えるようにしたい。

そのほかには、安定したWi-Fi環境のある場所に困った参加者が1名いたことが挙げられるが、学内にはWi-Fi環境の整備された場所が多くあるため、オンラインピア学習の課題とは捉えていない。

4. おわりに

コロナ感染症拡大後の2020年以降の日本人学生の留学傾向は激変し、オンライン留学という新しい道を開いた一方で、コロナ後を見据えた留学が高まる機運も見られない（海外留学協議会, 2022, 日本経済新聞, 2023）。コロナ感染症拡大前の日本人学生の留学に向かう動機を調査した菊地ら（2015）によれば、異文化の人々との交流から学生自身の内面的変化を生み出し、その内面的変化によって海外経験に向かう好循環を作る教育的な環境作りや、目標・ステップの設定からゴールまでのプロセスにおける達成感を持たせる自律型の国際交流学習といった学習形態が、日本人学生のグローバル人材育成には重要である（菊地ら, 2015, pp.67-68）。本稿で述べたオンラインピア学習の参加者の中にも「自由な海外往来ができるようになったら海外旅行に出たい」と言い出す者がおり、そのうち1名が自主的に海外研修に出た。オンラインピア学習という自律型の国際交流学習によって好循環の教育的な環境作りにつながった一例ではないだろうか。最終回アンケートに、「普段留学生と話すときは文法の違いなどを指摘されることは少ないが、今回の学習内では、違和感のある英語を話した時は、より自然に話せるようにアドバイスをもらうことができた点が良かった。」と書いた参加者がいる。このことは、単なる交流を超えたピア学習に取り組んだ証左と言えるかもしれない。また、フォローアップ調査に協力した参加者1名は、パートナーの学生と共有した時間を振り返り、第二次世界大戦でニュージーランドが参戦していた歴史やニュージーランドの先住民の存在といった彼からの話に対して自分自身の無知を恥じる様子も見られた。これは1対1の対話を通して知らなかった事実に関する深い洞察を得られたことを示しており、ピア学習に意義があったと考察できる。母語の異なる者同士が互いの言語や文化を学びあうタンドム学習をオンラインで行うEタンドムについて研究した小西（2021）や荒木（2020）も、言語を使うスキルの向上だけではなく、異文化に対する気づきを通じた学習内容の深さが生まれ、自国を外からの視線で見られる機会にもつながると指摘する（小西, 2021, p.62, 荒木, 2020, p.190）。

コロナ禍で中止や内容変更を余儀なくされ、参加者数の減少やアクティブラーニングの要素にかけた活動が見られ、コロナ前よりも不活性化した課外学習活動を補強するために試行的に取り組んだオンラインピア学習は、英語コミュニケーション力の育成や国際性の涵養といった十分に意義ある課外学習活動となりうることが分かった。また、日本人学生の気持ちを海外渡航に向かわせるきっかけともなりうる。協働相手となる大学の選定における苦労や計画・準備での時間的な手間といった課題はあるが、従来の対面での課外学習活動と並行しながら継続していきたい。

【引用文献】

- 1) 池田 佳子, ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題, JU CE Journal 2020 年度 No.2, pp.20-25, 2020.
- 2) 池田 佳子, 「バーチャル型国際教育」は有効か～日本で COIL を遂行した場合, ウェブマガジン『留学交流』Vol.67, pp.1-11, 2016.
- 3) 藤掛 千絵・山岸 敬和, COIL という教育手法の導入～南山大学の新たな国際化に向けての取り組み, ウェブマガジン『留学交流』Vol.103, pp.1-6, 2019.
- 4) 藤山 一郎, 日本・インドネシア間における COIL 型授業の実践と課題, 和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要第 2 巻, pp.108-118, 2021.
- 5) 柴田 弓子, 海外協定校とのオンライン国際協働学習に関する実践研究, 北九州市立大学国際論集 20 号, pp.77-89, 2022.
- 6) 川崎 典子, 工学部学生の国際化と課外英語学習についての実態調査 (2021 年 10 月実施) を終えて, 宮崎大学工学部紀要 No.51, pp.153-158, 2022.
- 7) 荒木 瑞夫, 海外との英語オンライン協同学習のカリキュラム化, 第 68 回九州地区大学教育研究協議会発表論文集, pp.183-190, 2020.
- 8) Association of Language Teachers in Europe (ALTE), The ALTE Can Do Project – English version, 2002. <https://www.alte.org/Materials> (2023/05/02 閲覧)
- 9) Eiken Foundation of Japan, The Eiken Can-Do List – English version. <https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/cando/list.html> (2023/05/02 閲覧)
- 10) 海外留学協議会, コロナ禍で日本人留学生の数が大きく減少。オンライン留学は定着の傾向～『一般社団法人海外留学協議会(JAOS)による 2021 年版日本人留学生数調査』調査レポート, 一般社団法人海外留学協議会による日本人留学生数調査 2021, 2022. <https://www.jaos.or.jp/newsrelease> (2023/05/19 閲覧)
- 11) 日本経済新聞, 留学生回復へ政府の策は～日本、学生の「内向き」突出, 2023/4/14. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA070YV0X00C23A4000000/> (2023/05/19 閲覧)
- 12) 菊地 千秋美ほか 3 名, 日本人学生は本当に「内向き」なのか～達成動機から観た日韓比較調査, 多文化関係学 12 巻, pp.57-70, 2015.
- 13) 小西 正恵, ビデオチャットでのイータンDEM・オンライン国際交流におけるコミュニケーションのための協働, Language Education & Technology 58, pp.43-67, 2021.